

談話標識のシノニムの記述を巡って

廣瀬 浩三

0. はじめに

談話標識の分析には、大きく分けて2つのアプローチが考えられる。一つは、各談話標識の意味や用法をつぶさに観察し、それを記述するアプローチである。もう一つは、談話標識を機能的に分類し、まとめあげる方法である。前者のアプローチで43の基本的な英語談話標識の意味や用法を記述したのが、松尾・廣瀬・西川編著(2015)である。

本稿では、主として、後者の立場から談話標識の分析をさらに一步進め、機能別にまとめあげた談話標識のそれぞれの差異をいかに記述すべきかを考察していきたい。英語談話標識のシノニムの記述方法を探るのが、本稿の目的である。

OALD⁹では、シノニム (synonym) を以下のように定義している。

a word or expression that has the same or nearly the same meaning as another in the same language

上記の定義に従うと、「ある語や表現が同一言語内で別の語あるいは表現と同じかほぼ同じ意味を持っている」という場合に両者がシノニム関係にあると言えるが、シノニム関係にある二つの言語表現をよりよく理解するためには、その共通する類似性ととも、その両者の差異を明らかにする必要がある。さらに、その差異を明らかにしていく上で考えていかなければならないのは、意味の相違とともに、用法の相違である。

では、談話標識の意味・用法の差異を記述するためには、どの様な観点から談話標識を整理していけばよいのであろうか？ 以下、まず談話標識の共通する基本的な意味機能を明らかにした上で、英語談話標識のシノニムの考察を行っていく。

1. 談話標識の共通点について

シノニム関係を問題にする場合には、その目的が相違点を見出すことであっても、その前提として、比較する二つの言語表現に共通点がないといけない。しかしながら、談話標識というカテゴリーは伝統的な品詞的分類とは異なり、副詞や前置詞句以外にも、間投詞や動詞、そして一部の名詞等、様々なものが含まれる。さらに、筆者が談話標識と認めるものの中には、*you know* や *I mean* のようなレキシカルフレイズと称される表現も含まれる。従って、すべての談話標識の語彙的な共通点を見出すことは難しく、かなり抽象的なレベルでの共通点とならざるを得ない。突き詰めていくと、談話標識の定義そのものに行き着くことになる。

以下、Aijmer(2013)において取り上げられた三つのキーワードを中心に、談話標識の共

通点をまとめ、談話標識の再定義を行っておきたい。

1.1 Reflexivity

Aijmer (2013) では、まず、談話標識が持つ共通の性質として reflexivity (再帰性) を認め、Verschuere(1999) を引用しつつ、以下のように述べている。

Reflexivity is manifested as the speaker's awareness of the linguistic choices made both with regard to what to say and how to say it (Verscheren 1999:187). Speakers have access to their own speech production and closely attend to what is going on; they are "metalinguistically aware" of what type of interaction they are involved in, if something goes wrong in the process, and what their attitudes are. (Aijmer 2013:4)

この言語の基本的な機能の一つとしての reflexivity の重要性は、Lucy(1993) により、以下のようにまとめられている。

In sum, speech is permeated by reflexive activity as speakers remark on language, report utterances, index and describes aspects of the speech event, invoke conventional names, and guide listeners in the proper interpretation of their utterances. This reflexivity is so pervasive and essential that we can say that language is, by nature, fundamentally reflexive. (Lucy 1993:11)

Lucy(1993) の述べている reflexivity には、かなり多くの言語現象が含まれるが、言語の基本的な機能として、外界の客観的事実を記述する面ではなく、メタレベルの言語使用に着目し、言語そのものについて言及する狭義の metalinguistic な使用、意味的な側面での metasemantic な使用、さらにはコミュニケーション活動について様々な側面を言及する metapragmatic、あるいは metacommunicative と言える言語使用の重要性を指摘しており、物理的な世界を描写する言語機能より上位の (meta 的な) こうした言語使用は、命題内容そのものに組み入れられるのではなく、その周辺に位置して聞き手に対して発話解釈を誘導する働きを持つ談話標識の本質的機能と通じるところがある。¹

1.2 Discourse markers as contextualization cues

談話標識の共通する特徴の一つとして、その名称から明らかなように、文レベルを超えて機能し、前後の発話とともに、さらに幅広く談話構造そのものとの係り合いを持っている。Gumperz(1993) では、文脈化合図 (contextulization cues) という用語を用いて、コミュニケーションにおける話し手の様々な方略を特徴づけたが、その具体例としては、音律的な面やジェスチャーに限って考察を行っているが、この用語は談話標識の基本機能として広く適用することができ、談話標識は、話し手が談話構造そのものに言及し、聞き手の理解を助けていると言えるのである。Gumperz(1993) がこの文脈化合図について以下のように述

べているが、contextualization cues というのを discourse markers に置き換えることができるのである。

As metapragmatic signs, contextualization cues represent speakers' ways of signaling and providing information to interlocutors and audience about how language is being used at any point in the ongoing stream of talk. (Gumperz 1996: 366)

特に、談話構造との関わりは、談話標識の中心的な役割を表し、談話全体の始めから終結の部分に至るまでの各段階で、その談話構成と関わって談話標識が重要な機能を果たすのである。まず、発話の生産と関わって、「切り出し」、「途中の言いよどみ」、「修正」、「進展」、「締めくくり」の各段階で談話標識が機能する。特に、「順番交代 (turn-taking)」との関わりで果たす機能も大きく、その他、話題マネジメントと関わって、「話題の開始」、「話題の継続」、「話題の変更」、「話題の脱線」、「主題への回帰」、「話題の終了」等を合図する。類似した意味を持つ談話標識の中から、実際の発話状況ではある特定の談話標識が選択されることになるが、それぞれの談話標識は、文脈化合図機能を内在しており、特定の文脈における文脈化合図によって、最もふさわしい談話標識が選択されるというふうに説明できる。

1.3 Meaning potentials

三つめのキーワードとして、意味的潜在性 (meaning potentials) を上げておきたい。Norén and Linell (2007) による意味的潜在性 (meaning potential) の考え方は、以下の通りである。

The basic assumptions of a theory of meaning potentials are 'that the linguistic resources provide language users with semantic resources to understand, say, and mean specific things in particular usage events, and that this always involves an interplay with contextual factors.' (Norén and Linell 2007:387)

ある言語表現には当然ある意味を伴うことになるが、それぞれ使用される文脈に応じて、具体的な意味機能が決まってくるという考え方である。この考え方は、廣瀬 (1999) で提示した「談話的志向性」にも通じるもので、談話標識について言うと、談話標識は固定された意味や機能を安定的に保持しているというよりは、実際に使用された文脈との関係で、その「談話志向性」が顕在化してくる言語表現であると言えるのである。

Aijmer(2013) が取り上げられた三つのキーワードを中心に、談話標識の共通点を踏まえ、談話標識の基本的な働きを確認しておきたい。

「談話標識」とは、話し手が主に伝達しようとする発話メッセージ [命題内容] の周辺

に位置し、聞き手はその内容を正しく理解するように意味解釈の仕方を合図する標識である。そして、その意味解釈の仕方を合図するにあたり、談話的志向性を備えており、文脈に応じ、話し手の態度表明・感情表出、情報価値、談話構造、対人関係等に聞き手の意識を向けさせる言語表現である。

以下、本稿の中心的な課題である談話標識のシノニムの記述についての考察を進めていきたい。

2. 談話標識のシノニムの記述の観点

2.1 知的意味と情的意味

筆者の知る限り、早期にシノニムに関して最も体系的な研究を行ったのは小西 (1976) である。小西 (1976:4) では、まず以下の3つにシノニムを整理している。

- ① 意味領域が重なるもの : *leap, jump; surround, enclose*
- ② 意味・含みは同じだが、用法が異なるもの : *a, an*
- ③ 意味は同じだが、含み・用法の違うもの : *father, dad*

さらに、意味を知的意味 (cognitive sense) と情的意味 (emotive sense) に大きく分類し、それぞれについて、さらに詳細に分類している (小西 1976: 5-6)。

【知的意味】

- ① 2つの知的意味が全く、ほとんど同じ場合 : *till, until; strike, hit*
- ② 一方の知的意味が他方を含む場合 : *hit, punch; understand, comprehend*
- ③ 一部の知的意味が重なる場合 : *punch, slap*

【情的意味】

- ① 一方が他方より強意的であるか : *repudicate, refuse*
- ② 一方が他方より感情がこもった語であるか : *repudicate, reject, decline*
- ③ 一方が道徳的賞賛または非難を含んでいるのに対し他方は中立的であるかどうか : *thrifty, economical; eavesdrop, listen*
- ④ 一方が、他方より、専門的な語であるかどうか : *decease, death; domicile, house*
- ⑤ 一方が、他方より文語的かどうか : *passing, death*
- ⑥ 一方が、他方より口語的であるか : *turn down, refuse*
- ⑦ 一方が、他方より方言的であるかどうか : *flesher* (スコット), *butcher*
- ⑧ 一方が小児語に属しているかどうか : *tenny, tiny*
- ⑨ 一方が他方よりあらたまった語であるか、くだけた語であるか : *garments, clothes, duds*
- ⑩ 一方が他方より古い感じを与えるか、新しい感じを与える語であるかどうか : *befall,*

chance, happen; finalize, complete

- ⑪ 一方が、他方より、上品な感じを与える語であるかどうか：*stout, fat*
- ⑫ 一方が婉曲的であるかどうか：*disable, cripple*
- ⑬ 一方が控え目的であるかどうか：*not bad, good*
- ⑭ 一方が軽蔑を含んでいるかどうか：*whore, prostitute*
- ⑮ 一方が皮肉を含みうるかどうか：*kindly, please*
- ⑯ 一方が戯言的なものであるかどうか：*better, half; wife*
- ⑰ 英米人の意識として一方が借用した語か、本格的な語か：*conflagration, fire; oeuvre, work*
- ⑱ 一方がアメリカ英語的であるか、イギリス英語的であるか：*sick, ill*

以上のように、小西(1976)は、かなり網羅的にシノニム記述の意味的観点を述べているが、談話標識における知的意味と情的意味については、談話標識はそもそも語彙の意味が薄いのが特徴であるので、それ自体の知的意味と情的意味を論じるというより、それぞれの談話標識がどのような発話を導くのかという観点からの区別となる。² そして、談話標識が機能する領域(domain)について考えていく必要があり、以下の Jucker & Ziv (1998:4) の見解を確認しておきたい。

The different studies of discourse markers distinguish several domains where they may be functional, in which are included *textual, attitudinal, cognitive* and *interactive* parameters. (様々な談話標識の研究によっておそらく機能的であるいくつかの領域が区別されており、その領域には、テクスト的、態度的、認知的、相互作用的なパラメーターが含まれる。) [斜体は筆者による。]

さらに、談話標識が機能する4つの領域を考えるにあたって注意しておくべきことの一つとして、ある談話標識がその生じた文脈の中で同時に複数の機能を果たすこともあり、上記のそれぞれの領域の境界は曖昧な(fuzzy)なものとして捉えておく必要がある。

以下、本稿の中心的課題である談話標識のシノニムの記述の観点を整理していきたい。

2.2 談話標識のシノニムの記述の方法

以下、小西(1976)に倣って、いかに談話標識の機能的差異をシノニム的に記述していくべきかを考察していきたい。まず、その記述方法について、大きく一般の語句と同様に、語彙的な観点、あるいは文レベルでの記述方法と文レベルを超えての談話的記述方法に整理していきたい。文レベルでは、以下の観点からのシノニムの記述が必要である。

- ① 言語使用域においてどのような相違があるか
 - (i) 地域差：アメリカ英語とイギリス英語における *hey, eh*, (ii) 年齢差：イギリス英語

における（若者が使用する）*cos*の使用；アメリカの若者が好む *like*, (iii) 男女差：女性が好む *sort[kind] of*, (iv) 話し言葉と書き言葉の差（スピーチレベルの差）：因果関係を表す *therefore, so*; 付加・追加を表す *furthermore, plus*

- ② 位置的にどのような相違があるか
 - (i) 文頭, (ii) 文中, (iii) 文尾に生じるか, 好まれる位置に差があるか : *Well, I was the most experienced adventurer in the group. / I was the most, well, experienced adventurer in the group. / I was the most experienced, well, adventurer in the group. / I was the most experienced adventurer in the group, *well.*
- ③ 共起する文の種類にどのような相違があるか
 - (i) 命令文, (ii) 疑問文, (iii) 感嘆文等との共起に制限があるか : **Like, pick up that piece of paper immediately.*
- ④ 共起する談話標識にどのような相違があるか
 - (i) 同じ機能を持つ談話標識との並列的共起, (ii) ある機能を強化するための共起, (iii) 他の機能を表す談話標識との共起等 : *Well, after all, it's my turn. / Well, besides, it's my turn. / *After all, moreover, it's my turn. / *Besides, however, it's my turn.*
- ⑤ 共起する修飾語にどのような相違があるか : *pretty please, *very please*
- ⑥ 反復的な使用が容認されるか否か : *Please, please don't forget.; Well, well, well.*
- ⑦ 単独用法が容認されるか否か
相手の発話を促す用法や応答表現としての用法があるか : *And/But/Because/So?; (Well,) Sort of, More or less, So to speak*

さらに、文を越えたレベルで、文脈や談話構造との関わりで、以下の観点からの記述が必要である。

- ⑧ 主としてどのような論理的な意味関係を表すのか
 - (i) 付加, (ii) 逆接, (iii) 因果関係等
- ⑨ 発話行為とどのような関係を表すのか
 - (i) 発話条件, (ii) 発話の力等との関係 : *You can stay here, if you like.* (許可)
- ⑩ 談話構造とどのような関係を表すのか
 - (i) 談話の切り出し : *now, so*, (ii) 談話の締めくくり : *anyway, okay*, (iii) 話題マネジメント等との関係 : *by the way, incidentally, anyway*
- ⑪ どのような談話方策として使用されているのか
 - (i) 談話修正 : *I mean, you know*, (ii) 時間かせぎ : *well, sort of, like*, (iii) 言いよどみとの関係 : *ah, I mean, well*
- ⑫ 先行発話を必ず必要とするのか否か
状況を受けて使用することができるか : (山のような帰宅した相手を見て) *So/?Therefore, you've spent all the money.*

この他、情報の授受及び対人関係調整に関して、以下の記述が必要となる。

- ⑬ 新情報、あるいは旧情報とどのように関わっているのか : *after all, you know, you see; ah, oh*
- ⑭ 情報の焦点化とどう関わっているのか : *like, sort[kind] of, well*
- ⑮ ポライトネスとどうかかわっているのか : *please, if you like, if you don't mind*

以上、列挙したシノニムの観点については、廣瀬 (2014) 及び松尾・廣瀬 (2015) で示した談話標識の分析的観点と重なる点が多く、さらに談話標識のシノニムの記述として必要な点を再整理していく必要があると思われる。以下、代表的な談話標識を例に取り、談話標識のシノニムの記述の在り方をさらに探っていきたい。

3. シノニムの記述の具体例

3.1 付加・追加を表す談話標識のシノニムの記述

付加を表す談話標識には、*and, also, besides, furthermore, in addition, moreover, plus, too, what is more* などがあげられるが、そのシノニムの記述に関して、まず、それぞれの言語使用域についての記述が必要である。これらの中で最も一般的な語は、*and* で、話し言葉や書き言葉を問わず、幅広く用いられる。その後、*also* と *besides* が続き、その言語使用域も広い。*furthermore, moreover, in addition, what is more* は主に書き言葉に用いられる。言語使用域がやや限定されるのは、文頭に来る *too* で、ジャーナリスティックなアメリカ英語に限られた用法とされる。

- (1) She's had her novel published this year; but *too*, she's written some interesting articles on acupuncture (彼女は今年小説を出版しているが、鍼 (はり) 療法についてもいくつかの興味深い記事を書いている。) (Quirk *et al*² 1985:637)

また、最近、付加を表す談話標識として台頭してきているのは、*plus* という談話標識である。くだけた話し言葉で用いられることが多いが、書き言葉でもよく用いられるようになってきている。

- (2) Rollie wanted more time than a fifteen-minute fuse could provide. *Plus*, he considered himself an expert and wanted to experiment with new devices.—J. Grisham, *The Chamber* (ローリーは15分間持つ導火線以上の時間がほしかった。しかも自分が専門家だと思い込み、新しい装置で実験を従っていた。)

同じ付加を表す談話標識でも、通例、前述した内容よりもさらに悪いことを付加する *to cap it all* と *to top [topping] it all (off)* という表現を見ておきたい。

- (3) a. I was lost, hungry, and *to cap it all*, it started to rain.—*LED* (私は道に迷い, お腹も減り, さらに悪いことに, 雨が降り出した。)
- b. *Topping it all off*, they found themselves locked out of their own house.—*CDAE* (あげくの果てに, 彼らはふと気づくと自分の家から閉め出されていた。)

(3a) のように, ピクニックに行っても, 道に迷い, お腹がすいてきて, さらに雨が降ってくると「泣きっ面に蜂」ということになる。(3b) も, 先行発話はないが, 結果として不幸が重なったことが示唆される。

このように, 付加・追加を表す談話標識についての言語使用域を中心に少し言及したが, は付加される後続発話と先行する発話との意味的關係における差異を明確にすることがシノニムの記述の重要課題として残っている。付加・追加の仕方にも, (i) 並列的な付加・追加, (ii) 前言を強化する付加・追加の場合が区別でき, さらに後者の場合, 相手との対人関係も関連し, (i) 相手に対する配慮からの付加・追加, (ii) 相手からの反駁を予め阻止する自己防衛的な付加・追加等が考えられ, 話し手の発話意図を明確にするシノニムの記述が必要となる。このように, 談話標識のシノニムの記述においては, 個々の談話標識そのもの特徴とともに, その使用される文脈的記述が重要となるのである。

3.2 逆接を表す談話標識のシノニムの記述

ここでは, 逆説を表す主な3つの *but, however, nevertheless* の相違について取り上げる。³ この3つの中で, *but* が最も広範囲に使用され, (3) のように, *however* と *nevertheless* は不自然だが, *but* のみが認められる例を見いだせる。

- (4) [speaker, who is in shock, has been given a whisky]
- a. *But* I don't drink.
- b. ?*However*, I don't drink.
- c. ?*Nevertheless*, I don't drink. (Balmkemore 2002:116)

端的に述べると, *but* は, 相手の想定に反する発話を導くことができ, 必ずしも先行文脈を必要としないが, *however* と *nevertheless* は, 必ず先行文脈を必要とするのである。また, 以下の(5)では, *however* と *nevertheless* にも文脈的差異が生じることがある。

- (5) [in response to: Have you got my article?]
- a. Yes, *but* the last page is missing.
- b. *However*, but the last page is missing.
- c. ?*Nevertheless*, but the last page is missing. (Blakemore 2002:116)

however では, 二つの発話に対立関係が生じれば容認されるが, *nevertheless* では, 両者に

論理的な矛盾があると解釈されるため、使用される文脈がさらに制限されるのである。

以上のように、逆接の談話標識が用いられる場合には、前後に来る発話には何らかの意味的・機能的対立があると考えられるが、(i) 論理的意味の対立、(ii) 発話条件との対立、(iii) 想定 (assumption) との対立、さらに (iv) 発話状況との対立等が考えられ、それぞれの発話状況にどの談話標識がふさわしいのかというシノニムの記述を行っていかなければならない。このような文レベルを超えた文脈的制限についての言及では、使用できない文脈の記述が重要となる。さらに付け加えると、こうした記述においてはネイティブスピーカーの敏感な判断が必要となるが、その判断を求める適切な文脈設定が大きな課題となろう。

3.3 相手の発話を促す談話標識のシノニムの記述

廣瀬 (2000) 及び廣瀬 (2001) で、談話標識の中には、相手から必要な情報を聞き出そうと、上昇調のイントネーションを伴い、単独で用いられるものが以下のように多くあることを見た。

and, because, but, so; for example [instance], like, such as; in other words, namely; eh, huh, no, oh, well, yes; meaning, which is [was] (what), which means [meant](what), etc.

接続詞や前置詞句から発達した用法については、それぞれの語彙的な意味を反映して、何が求められているか明らかなものもあるが、特に間投詞的なものについては、さらにそのニュアンスの吟味が必要である。Schourup(2001) が上げている以下の例を少し吟味してみよう。以下の例で、*so* と *well* では、相手に期待している発話内容が少し異なる。

(6) A: I learned three new words today. [pause]

B: *So?/ Well?*

(Schourup 2001:1054)

A に対して、*so* を用いると、*so* の原義が反映されて、その結果を尋ねていることになる。さらに、場合によっては、*So what?* の意と解釈されて、「それがどうしたんだ」と結論を迫る言い方になり、一方、*well* を用いると、相手の発話が不十分であることを示唆し、学んだ3つ新しい単語をどのようなものであったのかを具体的に尋ねることになる。

また、*well* と *yes, huh* を比べると、*yes* は基本的にあいづちを表し、*huh* はちょっとした驚きを示唆することにとどまるが、*well* は潜在的に「不十分さ」や「継続性」を示唆する特徴を持っているので、相手は情報を補わざるを得ず、少し押しつけがましい響きを伴うこともある。従って、レストランなどで、客の注文がはっきりしないときに、ウェーターが *well* を用いて注文を促すと少し無礼に感じられるといったニュアンスが生み出される (Schourup 2001:1033-1034)。

この他、談話標識は応答表現の単独用法として用いられるものが多くあり、まず、意味の類似したものをグループ分けし、個々の談話標識の差異を明らかにしていかなければな

らない。

4. おわりに

本稿では、談話標識のさらなる分析のアプローチとして、機能的な分類とともに、同じ機能にグループ分けされた談話標識をシノニム群として捉え直し、その差異について詳細な記述が必要であることを述べてきたが、紙幅の関係もあり、若干の具体例を挙げることにとどまった。今後の発展の方向性としては、2.2で示したシノニムの記述の観点をそれぞれ再吟味し、松尾・廣瀬・西川編著(2015)に匹敵する形でまとめあげる方法の提示が必要である。そして、さらに重要なことは、その提示した枠組みに従って、機能別に整理したシノニム群を体系的に記述していくことである。

談話標識が本格的に研究され始めて30年以上経過したが、その興味は尽きることなく、研究課題の宝庫であることは、変わることがない。ただし、個々の談話標識の記述にとどまる時代は終わり、体系だった研究をさらに発展させていく必要がある。そして、ある程度の研究が出そろった後に来るのは、その応用的研究である。日本人学習者にとって英語発信能力の向上が常に求められていくが、談話標識に関する知識を習得して、論理立てて情報を発信し、またその理解においても相手の真意を敏感に感じ取れる英語感覚を身につけていくことが重要である。筆者としても、本稿を足掛かりとして、談話標識のシノニムの記述の集大成を進めていきたい。

注

1 reflexivity を反映した言語現象として、以下の例を挙げている。

- ① メタ言語的使用：Get is an irregular verb./Spanish consonants are pronounced slightly differently in Mexico than in Spain.
- ② 間接話法：He said [that] he got a great haircut. Cf. He said, “Hey, that’s a great haircut you got!”/ Tom complimented me today.
- ③ I などの人称代名詞の使用 / 過去を表す～ed 等の時制マーカーの使用
- ④ 発話行為動詞の使用：I baptize you John Henry.

2 ただし、筆者の立場では、文副詞も談話標識として認めるので、この場合には、一般的なシノニム関係と同様の差異を記述することになる。

3 さらに意味が類似した逆接・対立を表す一連の表現の差異については、Fraser(1998)を参照されたい。

参考文献

- Aijmer, K. 2013. *Understanding Pragmatic Markers: A Variational Pragmatic Approach*.
Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Ball, W.J. 1986. *Dictionary of Link Words in English Discourse*. New York: Macmillan.
- Biber, D., S.Johanson, G.Leech, S.Conrad and E.Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and*

- Written English*. London: Longman.
- Blakemore, D. 2002. *Relevance and Linguistic Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fraser, B. 1990. 'An approach to discourse markers.' *Journal of Pragmatics* 14, 383-395.
- . 1996. 'Pragmatic markers.' *Pragmatics* 6(2), 167-190.
- . 1998. 'Contrastive Discourse Markers in English.' In A.H. Jucker and Y.Ziv (eds.). 1998. *Discourse Markers: Description and Theory*. Amsterdam: John Benjamins. 301-326.
- . 1999. 'What are discourse markers?' *Journal of Pragmatics* 31, 931-952.
- . 2006. 'Towards A Theory of Discourse Markers.' In K.Fischer (ed.), *Approaches to Discourse Particles. Studies in Pragmatics Series I*. Amsterdam/Tokyo: Elsevier Press. 189-204.
- Gumperz, J.J. 1996. 'The linguistic and cultural relativity of inference.' In J.J. Gumperz and S.C. Levinson (eds.) *Rethinking Linguistic relativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 廣瀬浩三. 1988. 「英語の談話修正表現について」六甲英語学会（編）『現代の言語研究』263-74. 東京：金星堂.
- . 1989a. 「談話辞 anyway の分析」『語法研究と英語教育』11, 29-38. 東京：山口書店.
- . 1989b. "A Discourse Grammar of anyway." 『島根大学法文学部紀要文学科編』11(2), 1-20.
- . 1997. 「Love means never having to say "What do you mean?" —メタ言語活動の諸相 (1)」『島大言語文化』4, 14-61.
- . 1998. 「メタ言語的観点から見た英語表現について」小西友七先生傘寿記念論文集編集委員会（編）『現代英語の語法と文法』東京：大修館書店. 287-95.
- . 1999. 「Love means never having to say "What do you mean?" —英語におけるメタ言語的活動の諸相 (2)」『島大言語文化』7, 1-51.
- . 2000. 「語法研究の立場から見た談話標識」『英語語法文法研究』7, 35-50. 25
- . 2001. 「談話の展開を促す談話標識」『英語青年』Vol. CXLVII, No.7, 446-47. 東京：研究社.
- . 2003. 「関連性理論から見た談話標識」『島大言語文化』14, 21-41.
- . 2012. 「談話標識を巡って」『島根大学外国語教育センタージャーナル』第7号, 1-37.
- . 2014. 「談話標識を再考する」『島根大学外国語教育センタージャーナル』第9号, 1-33.
- Jucker, A.H. and Y.Ziv (eds.). 1998. *Discourse Markers: Description and Theory*. P&B ns.57. Amsterdam: John Benjamins.
- Lucy, J. (ed.). 1993. *Reflexive Language: Reported Speech and Metapragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 松尾文子・廣瀬浩三・西川真由美編著. 2015. 『英語談話標識用法辞典』—4 3の基本的ディスコースマーカー—. 研究社.
- 松尾文子・廣瀬浩三. 2014. 「英語談話標識の諸相 (1)—英語談話標識研究の変遷」『梅光言語文化研究』第5号, 1-38.
- 松尾文子・廣瀬浩三. 2015. 「英語談話標識の諸相 (2)—談話標識についての基本的考え方と分析の観点」『梅光言語文化研究』第6号5, 1-51.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English*

- Language*. London: Longman.
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 2001/2004. 'Discourse markers: language, meaning and context.' In D.Schiffrin, D.Tannen and H. E. Hamilton (eds.), *The Handbook of Discourse Analysis*. Oxford: Blackwell. 54-75.
- Schourup, L. 2001. 'Rethinking well.' *Journal of Pragmatics* 33(7), 1025-1060.
- Schourup, L.C. and T. Waida. 1988. *English connectives*. 東京 : くろしお出版.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986/19952. *Relevance: communication and recognition*. Oxford: Oxford University Press.
- Verschueren, J. 1999. *Understanding Pragmatics*. London: Arnold Publishers.